

家庭と連携した発達障害のある子どものキャリア発達支援の課題と今後の展望 ：家庭向けキャリア教育の手引きの作成過程から

- 新堀 和子 (LD等発達障害児・者親の会「けやき」会員)
 大蔵 佐智子 (NPO法人ひの・I-BASYO)
 榎本 容子 (独立行政法人国立特別支援総合研究所)
 清野 絵 (国立障害者リハビリテーションセンター研究所)

1 背景と目的

近年、発達障害のある人の就労問題への関心が高まっている。発達障害のある人の就労選択肢としては、一般雇用のほか障害者雇用があるが、現状では、一般雇用での挫折を経て障害者雇用につながる流れがある。この理由として、特別支援教育体制は整備されてきたものの、障害特性を踏まえたキャリア発達支援は途上段階にあり、職業準備性やこれに対する自己理解（障害特性の理解含む）の不足のまま、キャリア選択に至る状況がある（榎本ら, 2023）¹⁾。

他方、本人の課題と共に指摘されているのが、家庭との連携に関する課題である（榎本ら, 2018）²⁾。この背景には、職業準備性の土台となる、家庭での生活面の支援の不足や、わが子が障害者雇用を選択することへの親の抵抗感があると考えられる。今後は、保護者が、①家庭生活における「今」の学びが「将来」の就労にどうつながるかを理解した上で、②家庭生活の中で、就労準備につながる視点を意識したり、③就労する上でのわが子の障害特性や必要となる配慮を、段階的に理解できたりするような学びの機会が重要となると考える。そして、家庭の中で、本人・保護者にとって無理のない形で、少しずつ、就労を見据えた家庭教育に取り組んでいくことが望まれる。また、そうした取組を、本人の支援に関わる学校や福祉（放課後等デイサービス）が連携し支えていくことが期待される。

こうした問題意識のもと、我々は、発達障害のある子どもの就労を見据え、学齢期から家庭で取り組めるキャリア発達支援プログラム（学校や放課後等デイサービスの支援のもと、家庭で無理なく取り組んでいくための手引き。以下、「手引き」とする）の作成を進めている。キャリア発達とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」をいい、よりよい人生を送る上で重要となる概念である。自分らしい生き方の実現に向けては、多角的な「自己理解」が、また、社会の中で役割を果たす上では、「就労に向けた基本的な力（自立に必要な力を含む）」を身に付けることが必要となるであろう。本発表では、手引きの作成を通じたこれまでの成果を報告するとともに、冊子の作成過程で見えてきた家庭におけるキャリア発達支援の課題と展望を報告する。

2 手続き

手引きの作成は、表1のプロセスで進めた（現在は(4)

を、(2)(3)の内容の確認・見直しを行いつつ実施）。

なお、本研究は、発達障害のある人の就労やキャリア教育について知識を有する研究者との協議を行いつつ、発達障害当事者の保護者が中心となり進めた。

表1 手引きの作成の流れ

ステップ	内容
(1)文献研究	発達障害のある人の就労上の問題や、就労に向けた家庭教育に関する文献の整理
(2)就労を見据え育みたい力の整理	就労に向け必要となる力をキャリア教育の視点から整理した後、家庭生活で育みたい力を、学校段階別に整理
(3)家庭教育内容の検討	(2)の内容を家庭で育むための「お手伝い」や「生活習慣」等の内容の検討
(4)家庭教育用「手引き」の作成	(3)の内容を分かりやすく、また、無理のない形で取り組めるようにするための手引き内容の検討及び、作成作業

3 これまでの成果

現在までの成果と課題は以下のとおりである。このうち、当日は、(3)(4)に焦点をあて報告する。

(1) 文献研究

発達障害のある子どもへの家庭教育について、CiNii Researchを使用した検索から68件の文献を抽出し整理した。多くの文献で共通していた項目は、①学校の取組、②指導内容、③家庭内の問題であった。①では、学校と保護者の理解、協力、連携の必要性が保護者と学校の双方から指摘されていた（鶴田, 2017）。②では、「国語文章題」「漢字の読み取り」「入れ子箱」「紐通し」（山本, 1999）、また、生活面の指導として、「買い物行動」「料理行動」（神山ら, 2010）や「性教育」（細田ら, 2020）が報告されていた。ソーシャルスキルトレーニング（氏家, 2018）や社会性と自己有能感を高める取組として、「傾聴と自己開示」のカードゲーム、ストレスマネジメント、さまざまな感情があることを学ぶ、リフレーミング、「認知行動療法・実践カード」によるセッション、セルフマネジメントブックの作成等（安部, 2013）、個別指導による学習支援（高山ら, 2019）を行っている報告もあった。③では、家族が障害受容のプロセスを経る中で、特に母親への支援が有効であることや（吉田, 2009）、父親への社会の仕組み作りやピアサポートを含む支援が必要であること（石

田, 2018 ; 石田ら, 2020) が指摘されていた。以上から、家庭との連携や家族への支援が重要であること、家庭での学習課題（主に買い物・調理等生活面）を本研究でも押さえる必要があること、一方、キャリア発達支援の内容は見あたらず、新たな視点からの連携や教材開発の必要性が見出された。

(2) 就労を見据え育みたい力の整理

- ① 就労移行支援のためのチェックリスト（障害者職業総合センター, 2007）等から就労に向け必要な力に関する項目を抽出し、基礎的・汎用的能力^註（中央教育審議会, 2011）等のキャリア教育の視点と関連付け、整理した。
- ② ①の能力のうち、家庭生活で育みたい力を、各学校段階別に整理した。整理にあたっては、「学校段階別に見た職業的（進路）発達課題」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2002）や、「知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」（国立特別支援教育総合研究所, 2010）の「各学部で育みたい力」等を参考とした。

(3) 就労を見据えた家庭教育内容

「自立生活サポートチェック表Ⅰ・Ⅱ」（東京LD親の会, 2017; 2018）等を参考として、学校段階で特に重要となる家庭教育内容を検討し、(2)で整理した力を育むための「お手伝い」や「生活習慣形成」等の内容を整理した。

現在までに、お手伝いとして「簡単な調理をする」「掃除をする」「時間管理を行う」「部屋の片付け・管理を行う」「洗濯をする」「買い物をする」「計画立案する」「ごみの分別・リサイクルを行う」という8つの内容、生活習慣として「生活」で自立する」という内容、家庭でのキャリア発達を促す取組として「かかわる力」「自分を見つめる力」「やりきる力」「かなえる力」の4つの力を育む内容を設定している。

(4) 手引きの作成方針

就労の土台となるのは、職業生活を支える生活面の力であり、こうした力を段階的かつ自然な形で育むことができるのが家庭である。また、家庭は、家族との対話を通じて、自分らしい生き方について考えるきっかけを提供することもできる。手引きの作成にあたっては、「専門的な知識を持たない保護者であっても、わが子の特性に寄り添いながら、日々の家庭生活でのかかわりを工夫したり、より丁寧に取り組んだりすることで、就労に向けた基本的な力を少しずつ、無理のない形で育んでいくことができる」よう、そのためのヒントを提供できるものを目指した。

(5) 作成した手引きの特徴

対象：働くことができる可能性を持ちつつも、障害特性による生きづらさを抱えている小学校低学年から高校生までの子どもの保護者とした。

内容：(3)のお手伝いの内容を簡潔かつできるだけ分かりやすく説明するとともに、その内容が就労に向けてどの

ように役立つか見通しが持てる形とした。また、発達段階別の指導や、学校や放課後等デイサービスとの連携のポイントを示した。個人の発達の状況や成長に合わせて必要な内容を判断することで、無理のない成長を望むことができると考える【手引きの実物は、当日の発表にて紹介する】。

4 家庭向けキャリア教育の手引きの作成に向けた今後の課題と展望

(1) 手引きの作成過程から見えてきた家庭におけるキャリア発達支援の課題

昨今の家庭事情として、共働き、少子化、核家族化、地域とのつながりの希薄さなどが挙げられる。保護者が地域の中で子育てを学ぶ機会も少なくなっている。こうした中、家庭教育に取り組みにくい保護者に対するアプローチの検討が必要である。他方、子どもの療育に熱心で、過度に家庭教育に取り組んでしまいやすい保護者へのアプローチも課題である。家庭において、療育の視点でお手伝いのねらいを掲げ、厳しく指導してしまうと、子どもの意欲の低下や、ストレスにつながってしまうことが懸念される。

(2) 課題解決に向けた展望

発達障害のある人にとって、生活面をはじめとした就労に向けた基本的な力の向上を図るためには、子どもの頃からの様々な体験が重要になると考える。そのためには、本人を取り巻く、理解ある身近な大人の協力があることが望ましい。家庭教育は母親が中心になりがちであるが、休日を利用した父親の参加を促すことで、母親の心身の負担の軽減となるだけでなく、より広い視野で子どもが持つ力や課題に気が付くことにもつながるであろう。また、楽しみながら作業をする時間を作り出せない家庭においては、放課後等デイサービス等を利用することで、その役割を担ってもらうことが期待できる。

【主要参考文献】

- 1) 榎本容子・清野絵編著『発達障害の就労とキャリア発達：ライフステージをつなぐ支援』, 新曜社, (2023)
- 2) 榎本容子・武澤友広・清野絵・新堀和子・安藤美恵・宮澤史穂『家庭と教育・福祉・就労の連携によるキャリア教育—早期からの生活場面での自己理解・仕事理解を深める取組を考える—』, 「日本LD学会第27回大会 自主シンポジウム抄録」, (2018)

註 分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力として「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つから構成される。

付記 本発表の取組にあたっては、岩田成美氏の協力を得ました。

【連絡先】

新堀 和子
e-mail : caco.n@utopia.ocn.ne.jp